ヒッポファミリークラブ ZOOM ウエビナー（2022.2.20）

やまちゃんの講演「英語も多言語も話せるようになった話」を聴いて

赤ちゃんのあどけない顔とともに、やまちゃんのトークが始まった。赤ちゃんというのはすべての可能性を秘めている。教育というものは、「子どもから可能性を奪っていくものだ」といった学者がいたが、押し付けの学習はそうなのかも知れない。

やまちゃんは、２歳の頃からヒッポファミリークラブに入って２５年の間、周りの人たちの多様な言語の中で育ってきた。言葉は、誰かに教えてもらうものではなく自分で学ぶものであると思っているという。多言語を話せるようになろうと習い事をしてきたのではない。

（ヒッポは「習い事」ではありません。先生と呼ばれる人に何かを教えてもらう、いわゆる習い事とは異なります。先生はいません。赤ちゃんのように、聞こえる環境を作り、人と出会い交流することを通して、自分でことばを見つけます）。

人間の内側には言葉を話す能力が備わっているので、赤ちゃんは自然に言葉が話せるようになる。ヒッポでは、それと同じで、たまたま身の回りに多言語を話す人がいると当たり前のように、多言語が話せるようになる。そのような環境が「言葉と人間の一番自然な関係」といえるので、ヒッポ的アプローチは「日本の学校での外国語の勉強」とは少し違うという。

私のこれまでの認識は、ヒッポでは子どもたちが遊びながら外国語を習っているという程度のことであったが、それは表層的な印象に過ぎなかった。今回のやまちゃんの講演で分かつた大切なことは、多言語を話す人たちの中にいると自然と多様性を学んでいるということである。そして多様性の中では自分の存在がはっきりと自覚できる。日本人ばかりの中にいると自分を目立たせるためには競争に勝たなければならない。しかし多様性の中では競争しなくてもいい。みんなが自然でいられる。

多言語を話すということは、その言葉を話す人と関わることであるから、自ずと多様性に触れることになる。多様性ということは、自分との違いが分かり、相手の不完全を許す力になる。美的感覚や価値観が異なる人たちと同じ思いをシェアできるようになることは素晴らしいことに違いない。

いま、国際間の紛争が起こりそうである。このようなときこそ、やまちゃんが言うように「言葉を重ねて、時間をかけて、相手のことを理解していく」ことが必要なのであろう。

私が学生の頃は、外国語は「読み書き」から始まり「話す」ことに時間をかけることは少なかった。いまは、学習方法も変わってきているようであるが、言葉はやはり、赤ちゃんアプローチが重要で、自然に、そして当たり前に身につくような環境に自分を置くことの大切さがよくわかった。

（ヒッポでは「外国語」「外国」ということばを使わないそうです。どんなことばも「同じ人間のことば」ととらえている、ということです）。

講演の後の座談会でも参加された皆さんが、明るい笑顔で、自分の思いを話し合っているのが印象的であった。よい勉強をさせていただいた。